

**主 題：信仰と罪：壊れた関係を修復する3**  
**聖書箇所：コリント人への手紙第二 7章8－9節**

今朝、皆さんとともに見ていきたいのはコリント人への手紙第二7章の8節と9節のみことばです。私たちは今、信仰者と罪に関して、もっと言えば、「壊れた関係を修復するための八つの要素」について、パウロとコリントの教会との間に起きた出来事から時間をかけて学んでいます。今日もその続きをいっしょに見て行きましょう。

その内容に入る前に、まず皆さんに考えてほしい重要な質問があります。ある日、皆さんが散歩をしている時、道の先に大きな窪みがあるのにそれに気づいていない、このままいけば足を取られそうになっている私を見かけたら、皆さんは声を掛けてくれるでしょうか？だれも掛けてくれませんか？皆さんならきっとかけてくれると思いますが、では皆さん、私がある窪みに気付いているのに大したことないと考えて突き進もうとしているなら、それを見た皆さんは大きな怪我につながると判断として私のことを引き止めてくれるでしょうか？先ほどより増えました（笑い）。

では皆さん、それが私ではなく、例えば、間違った道へと迷い込んでいっている自分自身の子どもや家族、また、友人なら、皆さんは「そっちに行ったらダメですよ」とそのように注意するのでしょうか？どうでしょう？では反対に、皆さんが私の立場であったとして、皆さんは周りの人に声をかけてほしいと思いますか？恐らく、そうされたいでしょう。周りの人が私の進む先に危険があることを分かっているなら、正しい道から迷い出ていることに気付いているなら、そのことを教えて欲しいと願うはずですよ。

愛するわが子であったり、夫や妻、両親などが、大きな怪我や痛みへと向かう恐れ、そんな危険へと近づいていこうとしているなら、皆さんはその人たちを愛しているからこそ、危険があるよと注意して、正しい道へ戻るようにと必死に促そうとするでしょう。このように聞いて来て、こう思っている人もいるかもしれません。そんなことは当たり前じゃないですか？危険が迫っているなら、私も知らせてほしいし、私も喜んで教えてあげたい。当たり前のことですよ…と。

でも、皆さん、私たちは時にこのような危険や苦痛が迫っているにもかかわらず、それを教えてあげることをためらったり、渋ってしまうことがあるのです。どんなときだと思いますか？それはその危険というものが私たちの罪に関わるときです。どうですか？私たちは聖書からこれまで何度も何度も罪がどれほど危険で悲惨な影響をもたらすものであるかということを読んで、知識としては知っているかもしれませんが。ヘブル書の著者もこのようなことばを残しています。ヘブル3：13「きょう」と言われている間に、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされてかたくなにならないようにしなさい。罪は「かたくなになる」という危険を持っているのです。そのような危険を私たちが知っているなら、だれかが罪に陥っているなら、その罪を正してあげようとしませんか？だれかが真理から離れて行って、偽りの道に歩んでいるその姿を目にすれば、呼び止めて「その道は間違っていますよ、正しい道へと戻って来なさい」と、熱心に励まそうとするのでしょうか？

反対に、だれかが自分のところにやって来て、「あなたのやっていることは神様の前に間違っていますよ、その道を進んでいくと大きな問題を引き起こしますよ」とそう告げられたなら、そのことばに耳を傾けるのでしょうか？どうですか？兄弟姉妹のうちに罪を見たときに、私たちはそれを見て見ぬ振りをしないのでしょうか？それとも、その人を愛しているから罪を戒めようとするのでしょうか？また、私のことを愛してくれているからこそ伝えてくれた、知らせてくれた、そんな兄弟姉妹のたとえ厳しいことばであっても素直に耳を傾けようとするのでしょうか？

今日、私たちがみことばから考えていきたいこと、それはこのように「愛をもって罪を戒める」ということです。それがどのようなものなのか、どのように為されるべきなのか、そのことを改めてよく考えてみましょう。ではまず、今日のテキストとなるみことばを見ましょう。これまでを振り返って7章の5節から9節までを読みます。「:5 マケドニアに着いたとき、私たちの身には少しの安らぎもなく、さまざまな苦しみに会って、外には戦い、うちには恐れがありました。:6 しかし、氣落ちした者を慰めてくださる神は、テトスが来たことによって、私たちを慰めてくださいました。:7 ただテトスが来たことばかりでなく、彼があなたがたか

ら受けた慰めによっても、私たちは慰められたのです。あなたがたが私を慕っていること、嘆き悲しんでいること、また私に対して熱意を持っていてくれることを知らされて、私はますます喜びにあふれました。:8 あの手紙によってあなたがたを悲しませたけれども、私はそれを悔いていません。あの手紙がしばらくの間であったにしろあなたがたを悲しませたのを見て、悔いたけれども、:9 今は喜んでいます。あなたがたが悲しんだからではなく、あなたがたが悲しんで悔い改めたからです。あなたがたは神のみこころに添って悲しんだので、私たちのために何の害も受けなかったのです。」

思い返してみてください。私たちはこれまでに壊れた関係を修復するための八つの要素のうちの一つを既に見て来ました。一つ目に見たのは「慰めを与えてくださる神様の存在」でした。コリントの兄弟姉妹たちによって何度も何度も傷つけられて、大きな悲しみを抱いて弱っていたパウロに、慰めを与えたのはほかのだれでもない神様だったのです。6節にこのように書かれています。「しかし、氣落ちした者を慰めてくださる神は、…私たちを慰めてくださいました。」と。これまで何度も見てきましたが、この世から受ける激しい迫害に加えて、コリント教会によっても、大きく傷つけられていたパウロは、文字通り、肉体的にも精神的にも疲れ果てていました。人間的に考えるなら、希望など見出せない、そんな状況に彼は置かれていたのです。

しかし、そんな絶望と思える状況にあっても、パウロは神様のうちにこそ、どんな困難な状況にあらうと、自分の弱った足を奮い立たせるのに十分な励ましと力があるとそう固く信じていました。そして、その通りに神様は彼のうちに働いて、落ち込んで悲しみのどん底にいた彼の心を引き上げて、大きな慰めと喜びを与えられたのです。これがすべての慰めの神が持つ偉大な変わらない力だったのです。感謝なことは、今の私たちも同じ慰め主であるこの神様に信頼して身を委ねることができるということです。たとえ、どんなに私たちの目には手に負えない先の見えない大きな問題と思えることがあったとしても、私たちはそれさえも支配しておられる神様のうちに、変わらず平安を見出すことができるのです。だからこそ、私たちにとって大切なことは、様々な問題に心を奪われるのではなく、偉大な力を持った慰めの神様にただ依り頼むことでした。これがまず一つ目に見た要素でした。

先週、二つ目に見たのは「準備されていた恵みの態度」でした。テトスとの再会を経て、頑なであったコリント教会の兄弟姉妹たちが、真の悔い改めへと導かれたということを知られた時、パウロの心には大きな喜びが溢れていました。7節にこのように書かれています。「…あなたがたが私を慕っていること、嘆き悲しんでいること、また私に対して熱意を持っていてくれることを知らされて、私はますます喜びにあふれました。」と、パウロの心は喜びにあふれたのです。でも皆さん、コリントの兄弟姉妹たちが彼に対してしたことを考えれば、パウロのこの態度はすごいと思いませんか？

ここまで見て来たように、コリントの教会は自分たちのためにすべてを犠牲にして熱心に伝えてくれたパウロと福音を捨てました。偽預言者、偽教師に騙されていた部分はあったにしろ、彼らはパウロの働きを非難して彼の心に大きな傷を負わせてしまったのです。教会の中に大胆にパウロのことを咎めて侮辱する様な者が現れました。でも、その者に対して教会は何もしなかったのです。むしろ、そのような罪を犯した者ではなく、どんなときも自分たちに変わらず接してくれていたパウロの愛を、コリントの教会の人たちはことごとく踏みにじっていたのです。ですから、パウロは彼らに対して苦い思いや敵意を抱いて復讐心を覚えたとしてもおかしくない、それ程の酷い仕打ちを受けていたのです。たとえ、彼らが悔い改めたと耳にしても、「あー、やっと彼らは悔い改めたのか、やっと自分たちの過ちを認めたのだね。では、これまで私に対してして来た様々の仕打ちの報いを味わわせてやろう、何度も傷つけられて悲しみを受けた、この苦しみを彼らにも味わわせてやろう」などと、そのような不満や怒りに捉われていたとしてもおかしくなかったでしょう。

しかし、パウロはそうはしませんでした。確かに、彼は大きな痛みをコリントの兄弟姉妹たちから繰り返して受けました。意気消沈して涙を流すこともあり、心のうちに少しの安らぎも見出せないほど悩み、悲しむこともありました。しかし、そんな彼はコリントの人たちが罪を心から悔い改めて、自分との関係を修復したいと望んでいるということを知った時に、その兄弟姉妹たちを喜んで受け入れたのです。パウロは自分の手で彼らに対してさばきを下そうとは考えてはいませんでした。彼はテトスから話を聞いた時、すでに彼らを喜んで赦して受け入れるという、そのような心の態度が準備されていたということです。そして、そんなパウロの持っていた「準備されていた恵みの態度」こそ、壊れた関係を修復する上

で私たちにとっても必要となる二つ目の要素でした。

さて、ここまで私たちは一つ目と二つ目の要素を見たわけです。今日は三つ目を考えてみたいと思います。

### 3. 愛を伴う罪への戒め 8-9節

壊れた関係を修復するための八つの要素のうち、三つ目に挙げられるものは「愛を伴う罪への戒め」です。罪によって壊れた関係を修復するには、時にその人の最善を願うがゆえに、愛をもって罪を正しく責めることも必要になるということです。8節からもう一度見ると「:8 あの手紙によってあなたがたを悲しませたけれども、私はそれを悔いていません。あの手紙がしばらくの間であったにしろあなたがたを悲しませたのを見て、悔いたけれども、:9 今は喜んでいます。あなたがたが悲しんだからではなく、あなたがたが悲しんで悔い改めたからです。あなたがたは神のみこころに添って悲しんだので、私たちのために何の害も受けなかったのです。」

さて、ここに私たちはまたパウロのすばらしい模範を見て取ることができます。皆さん、まさにパウロこそ愛をもって罪を戒めていた人物でした。どういうことか？少し文脈を思い返してみてください。コリントの兄弟姉妹たちが罪を犯して、それによってパウロは大きく傷つけられました。でも、彼はそんな彼らの罪を見て見ぬ振りをすることはありませんでした。何度も罪を犯す彼らに対して、諦めて冷たく距離を取ったり、また、「もういい！」と関係を断ち切ろうともしませんでした。パウロはそのような罪を正しく指摘するために、厳しい手紙をテトスに託して彼らの許へと送り届けたのです。

彼は自分が書いたその手紙の内容が余にも厳しいものであったから、彼らのうちに悲しみを引き起こすことになることを予め分かっていた。もっと言えば、その手紙を記している時から、この手紙を送ったなら、コリントの人たちのうちに大きな悲しみが起こるということを彼は分かっていたのです。しかし、どれほど人々の心を悲しませることになろうとも、どれほど彼らの心が苦しい思いになったとしても、コリントの教会を心から愛していたパウロは涙ながらに手紙を記したのです。そのときのパウロの思いがこのようにⅡコリント2:4に記されています。「私は大きな苦しみと心の嘆きから、涙ながらに、あなたがたに手紙を書きました。それは、あなたがたを悲しませるためではなく、私<sup>パウロ</sup>があなたがたに対して抱えている、あふれるばかりの愛を知っていただきたいからでした。」と。パウロは厳しい手紙を彼らに送りました。自分がこの手紙を送ることによって、彼らが悲しむことになることを彼はよく分かっていた。でも、彼が何よりも願っていたことは、この手紙を通して、自分が彼らのことを愛しているということを伝えたいことでした。パウロはこうして罪を正しく戒めることで彼らに愛を示していたのです。

そして皆さん、これは私たちにとっても非常に大切なこととなります。なぜなら、ある人は、この罪を正すということに関してこのような思いを持っているかもしれないからです。罪を指摘すれば相手の人が悲しい思いになったり、不快な思いになったりするのを私は知っています。間違いを正そうとすると、その問題が解決するのではなく、互いの関係が壊れてしまうことになりませんか？本当の愛とは悲しみや痛みを与えることではないはずです。だから、私はだれかの罪を戒めることはしませんが…。でも、皆さん、このような考え方はパウロがここで示していた愛とは全く異なるものでした。

皆さん、どこが異なると思いますか？何が違うのでしょうか？それは、パウロの愛というのは、自分のことを中心に考えるのではなく相手の最善を何よりも考えるものだったということです。考えてみてください。繰り返しますが、パウロは自分の厳しいことばがコリントの教会にもたらす影響の大きさを当然理解していました。もっと言えば、彼自身はコリントの人々を悲しませることが喜びだなどとは微塵も思っていないでいました。8節にはこのようなことばが記されています。「…あの手紙がしばらくの間であったにしろあなたがたを悲しませたのを見て、悔いたけれども、」と。彼は自分が書き送った手紙のことで後悔を覚えることもあったのです。言い換えるなら、心から愛していた兄弟姉妹たちに対して厳しい叱責のことばを掛けることは、パウロにとっては容易なことではなかったということです。できることなら、彼らを思い悩ませたり、悲しませたりはしたくはなかったのです。

でも、その一方で、パウロはコリントの兄弟姉妹たちが直面していた問題に関して、それを黙って見過ごすことはできませんでした。愛する者たち、自分が心から愛する者たちが、偽教師の惑わしによって間違った道へと進んでいるその姿を目の当たりにして、彼はこれ以上彼らをその罪の危険に晒させることは絶対にできないと、そのように判断したのです。皆さん、ここにパウロの葛藤を見て取れませんか？パウロの心の内には私はコリントの兄弟姉妹たちのことを悲しませたくはないという思いを持っていたの

です。厳しい手紙を書いて悲しませたくはないと。

でも反対に、彼らが今非常に大きな危険に遭っているから厳しいことばをもってこのことを伝えなければいけないと、この二つの思いが彼のうちで葛藤していたのです。そして、彼は自分のことよりも自分の愛する者たちの最善を願っていたからこそ、彼は自分の感情に難しさを感じるがあったけれど、その感情を優先させるのではなく、その思いを犠牲にして厳しい手紙を書き送ったのです。彼らを愛していたからこそ、自分にとっての最善ではなくコリントの兄弟姉妹たちにとっての最善を彼は実践したということです。彼らが絶対に聞かなければいけないから、彼らが今危険に遭っているから、悲しませることになって悲しいけれども、彼らを愛するから私はこの手紙を送ろうと、そのように決めたのです。

皆さん、もし、私たちが自分のことを何よりも愛していて、自分の心のうちにある平安が保たれること、自分自身のうちにある平安がだれかとの争いに巻き込まれることによって取り除かれることを嫌って、その人に真実や罪を語らないなら、果たして、それは愛と言えるのでしょうか？自分自身のことを考えて、兄弟姉妹が聞かなければいけないことを、兄弟姉妹が危険に遭っているのにそれを正して上げないこと、それは果たして愛と言えるのでしょうか？それは聖書が教えている愛でしょうか？

箴言にはこのようなことばがあります。27：6「**憎む者が口づけしてもてなすよりは、愛する者が傷つけるほうが真実である。**」と。パウロはコリントの教会の罪を厳しく懲らしめました。しかし、パウロは彼らの悲しみを喜んでいただけではなかったのです。むしろ、自分の手紙が少しでも彼らを悲しませてしまったと知って、そのことを悔やみもしました。しかし、まるで父親が愛する息子の最善を願うかのようにコリントの兄弟姉妹の最善を何よりも願っていたパウロは、彼らが聞かなければならない罪を正しく責めていたのです。そして、その結果、彼らは悔い改めたのです。そして、そのことによってパウロは大いに喜び、感謝しています。

パウロはこのように愛をもってコリント教会の兄弟姉妹の過ちを正そうとしました。では皆さん、私たちはどうでしょうか？果たして、私たちはパウロのように愛する者たちの最善を願って、罪を正しく責めるということをしているのでしょうか？私たちが優先するのは自分自身の快適さや自分自身の心の平安でしょうか？それとも兄弟姉妹のその安全をその最善を優先するのでしょうか？もっと言うなら、私たちは教会において、互いの中で罪を戒め合うということ、それがどれほど欠かせないことだと考えているのでしょうか？正直に言うと、皆さん、私たちにとって互いに戒め合うこと、正し合うことほど困難に思えるものはないかもしれません。互いの罪を指摘することは相手を傷つけることになってしまうから、私は余り得意ではありません、関係を壊すくらいならそんなことなどしなくてもいいのではないですか？と、そう思い込んでいるかもしれません。

でも皆さん、私たちが聖書を見れば聖書はそのようには教えていないことに気づきます。むしろ、教会のかしらであるイエス・キリストは教会内における聖さを保つために、そのようにして罪を正すことの重要性を明らかにしておられました。「愛を伴う戒め」ということが私たちひとり一人にとってどれ程欠かせないものか、どれ程重要なものか、そのことを今少し、残りの時間で考えてみましょう。テキストはマタイの福音書です。マタイ18章、ここには教会内における罪の問題に関して、私たちはどのように向き合うべきなのかが記されていますが、18：15－17から時間をかけて考えてみましょう。

## ●愛を伴う戒めの重要性：三つの理由＝マタイ18：15－20

### 1) 罪が深刻な問題であるから 17節

聖なる神様が罪を忌み嫌っておられ憎んでおられるからこそ、私たちは罪を戒める必要があるのです。でも皆さん、問題は、私たちは時に聖書が示していることと同じ深刻さでその罪を捉えてはいないということです。いつもなら、15節から順に見ていくのですが、ここでは最後の17節から見てみましょう。この点がはっきりすれば、なぜ、兄弟の罪と向き合うことが重要なものがより鮮明になるはずです。17節にはこのように書かれています。「17 それでもなお、言うことを聞き入れようとしないなら、教会に告げなさい。教会の言うことさえも聞こうとしないなら、彼を異邦人が取税人のように扱いなさい。」、罪を犯した兄弟姉妹たちに対して、罪を認めて悔い改めるようにと何度も何度も求めたにも関わらず、その人がそれを認めない、全く話を聞き入れようとしない場合、最後に待っているのは「彼を異邦人が取税人のように扱いなさい。」ということです。この当時、異邦人というのはユダヤ人社会の中で疎まれ完全に嫌われている、全く相容れない存在でした。また、取税人は異邦人以上にユダヤ人から嫌われ、裏切り者として扱わ

れている存在だったのです。なぜか？それは彼らが自分たちの敵であるローマ帝国のために仕えて、ユダヤ人たちから税金を取り立てていたからでした。仲間であるはずのユダヤ人たちの中で、ユダヤ人から税金を取り立てて敵であるローマにそれを納めていたのです。だから、自ら取税人となるような者を人々は軽蔑して、関わりを持つとはしませんでした。

まさに、あのザアカイのことを思い出してみても、ザアカイに対する人々の態度はそのようなものでしたね。覚えておられますか？イエス様が取税人であったザアカイの家に泊まることになったときに、その光景を見た人々はこんなことを言っていました。「あの方は罪人のところに行って客とられた。」（ルカ 19：7）と。そのようにつぶやいて非難していたのです。ですから、異邦人にしても取税人にしても、この人たちはどちらも当時のユダヤ人たちにとって関わりを持つとしない忌み嫌われている者の代表的な存在だったのです。そして、そんな人たちを挙げて、イエス様はここで悔い改めずに自らの意思で罪を犯し続けるような者を彼らと同じように扱いなさいと言われたのです。言い変えるなら、彼らが自ら「聞き入れない」という選択をするのであれば、教会の群れの交わりから彼らを除きなさいと言われたのです。

皆さん、私たちがこのように「教会から除く」とか「教会戒規」ということばを聞くと、ネガティブなイメージを持ってしまいますが、勘違いしてはいけないのは、このように彼らを扱う目的は、その人を辱めるためではないということです。この後にも何度も見ていますが、このようなことをするのは、その人が罪に気づいて悔い改めて神様に立ち返ること、神の家族との交わりを回復することが目的なのです。交わりを回復することが目的なわけです。でも、ある人はこのように思うかもしれません。例え、罪を認めさせて悔い改めへと導くためであったとしても、交わりから除くなんて余りにも厳しすぎませんか？と…。でも皆さん、このことを厳しいと考えるのであれば、よく自分自身に問い掛けなければいけません。何を問い掛けるべきか？「自分は本当に罪の深刻さを理解しているのだろうか？」ということです。

皆さん、私たちは時に神様の罪に対する考えや教え、命令を目にするとき、「厳しい！」「難しい！」と感じてしまうことがあつたりします。でも、多くの場合、私たちは聖なる神様がどれ程罪を忌み嫌われるお方なのかをそのことをときに忘れてしまっているのです。ここで少し、教会の中の罪を神様がどのように取り扱われて来たのかということ、そのいくつかの例を聖書から見たいと思います。

#### ・アナニヤとサツピラ :

アナニヤとサツピラはどうだったでしょう？ペンテコステの日以来、ペテロの語った福音を多くの人たちが受け入れて、教会は成長していきました。人々は持ち物売り払って、互いの必要のために仕え合っていました。すべてのことが順調に思われました。しかし、そんなときにこの二人は持ち物売り払った代金の中からその一部を手元に残しながら、あたかもすべてを捧げたかのように持って来て使徒の前に置いたのです。彼らは自分たちが周りの者から称賛されたい、良く思われたいという思いをもって、教会だけでなく、何よりも神様を欺きました。

その結果、どうなりましたか？このように書かれています。使徒の働き 5：4-5 「4 それはもともとあなたのものであり、売ってからもあなたの自由になったのではないか。なぜこのようなことをたくらんだのか。あなたは人を欺いたのではなく、神を欺いたのだ。」：5 アナニヤはこのことばを聞くと、倒れて息が絶えた。そして、これを聞いたすべての人に、非常な恐れが生じた。」でした。非常な恐れが生じたのです。神様は教会の始まりの段階において、ご自身が罪を厳しく扱われるということの人々の前に公に明らかにされたのです。人には見えない隠れている罪も、心の中で企んでいるその意図的な罪も、すべてをご覧になっておられる神様は罪を忌み嫌っておられるということです。

#### ・コリントの教会

コリントの教会に対してもそうでした。言うまでもなく、コリントの兄弟姉妹は数多くの問題を抱えていました。その中の一つの大きな問題は、彼らのうちにあった不品行の罪でした。Iコリント 5：1-2にこのように書かれています。「1 あなたがたの間に不品行があるということが言われています。しかもそれは、異邦人の中にもないほどの不品行で、父の妻を妻にしている者がいるとのことです。：2 それなのに、あなたがたは誇り高ぶっています。…」、彼らは異邦人の中にもないほどの不品行を行って、しかも、そのことを誇り高ぶっていたのです。

また、そのような不品行の問題が教会の中に蔓延っただけでなく、彼らは主の晩餐に集まって来

るときにも、大きな問題を抱えていました。ある者たちは他の兄弟姉妹のことを軽んじたばかりか、ふさわしくないままで主の晩餐に与って、主のからだと血に対して罪を犯す者もいたのです。そのような者たちに対して神様がどのように報いられたのかが、Iコリント11:30にこのように記されています。

「そのために、あなたがたの中に、弱者や病人が多くなり、死んだ者が大ぜいいます。」と。罪を犯した者に神様は厳しい懲らしめを与えられ、それによって死んだ者もいたというのです。

皆さん、ある人はこのような箇所を読むと、すぐにこう思うかもしれません。これは当時の世界ではあり得たことだけれど、今の私たちには当てはまりませんと。でも、本当にそう言えるのでしょうか？これはもちろん、救われた信仰者たちがその救いを失うということを行っているではありません。パウロも繰り返しこのことを話していましたが、たとえば、ローマ8:1では「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」とそのように教えていました。救いをいただいた者はその救いを失うことはないということ、それは聖書が繰り返し教えている約束でもあるのです。しかし同時に、罪とは一切関わりを持たない聖く完全な神様は、ご自分の子どもたちが罪から離れるように愛のゆえに懲らしめを与えることがあるということです。アナニヤとサツピラの罪に、また、教会の罪に対して厳しく報いられたその聖なる神様のご性質は、昔も今も決して変わってはいません。

だからこそ、私たちは罪をいつも軽く考えてはいけないというわけです。では皆さん、ここで立ち止まって考えてみてください。聖なる神様が罪に対して懲らしめを与えられることがあるということ、私たちはそのことはよく分かりました。でも、そのことを当時の信仰者たちは知らなかったのでしょうか？どう思われますか？もちろん、彼らも知っていました。コリントの教会に関して言えば、彼らはパウロから教えを受けていたのです。それなのに、どうして彼らは聖なる神様の前に異邦人さえもしないような酷い罪を平気で犯すようになったのでしょうか？その一つの答えが先ほど見たIコリント5:2の続きにこのように書かれています。「…そればかりか、そのような行いをしている者をあなたがたの中から取り除こうとして悲しむこともなかったのです。」と。彼らの抱えていた問題が何かお分かりですか？もちろん、彼らが犯していた不品行は大問題でした。しかし、それらを目にしていたコリントの教会の人たちは、罪を犯している者たちに対して悲しみを抱くことも罪を戒めることもしなかったということです。彼らはその罪を見て見ぬ振りをしました。罪に対して妥協したのです。そして、そのことが教会内に重大な結果をもたらしていたのです。だからこそ皆さん、ここで覚えておくべき大切なことがあります。それは、もし、私たちが罪は深刻な問題であると知っていながら、その罪を愛をもって正そうとしないのであれば、その罪は神の家族のうちに蔓延し、深刻な問題をもたらすということです。罪は放っておけば大変なことになるということ、そのことをコリントの教会が教えてくれているのです。

だからこそ、私たちは罪を正しく取り扱う必要があるのです。どうでしょう、皆さん？私たちは周りの人を指差す前に、自分自身の罪に深刻な問題があると考えているのでしょうか？考えているなら、私たちは自分のうちに見て見ぬ振りをしている罪はないのでしょうか？また同時に、私たちが教会を愛して神様を愛し教会の聖さを保つことを考えているなら、私たちは他の兄弟姉妹の罪を見て見ぬ振りはしないはずですよ。ある人のうちに根付いている罪を認めていながら、その人に嫌われたり関係が壊れることを恐れて、そのままで良しとしていないのでしょうか？

もちろん皆さん、これは私たちが他の人をさばくことが目的ではありません。自分の正しさを人に押し付けることでもありません。なぜ、私たちはこのことをするのか？それは同じ神の家族として生きている兄弟姉妹たちが、罪によって正しい道から迷い出ていて苦しんでいることを知っているからこそ、自分にとっても心を痛める問題であるからこそ、愛をもってその罪を正して上げようとするのです。パウロはIコリント12:26でこのように言っています。「もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに痛み、もし一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。」と。

キリストによって罪赦され贖われた私たちは、もはや自分のために生きているわけではありません。私たちはみな同じキリストのからだの一部分であって、だれかが罪によって苦しめば、みなも同じように苦しむということです。だからこそ皆さん、私たちは同じ神の家族として、罪のもたらす影響が深刻なものであると分かっているからこそ、互いの罪に対して正しく向き合おうとすることが必要になるのです。罪が深刻な問題であるということ、それが私たちが罪と正しく向き合うことが必要だというその一つの理由でもありました。そして、これは「愛を伴う戒めの重要性」の二つ目の理由にもつながります。



## 2) 互いを愛しているから 15-17節

皆さん、私たちが互いを愛しているから、互いの中で愛をもって戒め合うことが必要になるのです。教会にあって、神様の栄光が現されること、他の兄弟姉妹の最善を願うからこそ、私たちは互いの罪を愛をもって正そうとするのです。どのようにしてこのことをするのか？その方法についてもイエス様ははっきりと教えています。マタイ18：15-17にこのように書かれています。「15 また、もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、行って、ふたりだけのところで責めなさい。もし聞き入れたら、あなたは兄弟を得たのです。16 もし聞き入れないなら、ほかにひとりかふたりをいっしょに連れて行きなさい。ふたりか三人の証人の口によって、すべての事実が確認されるためです。17 それでもなお、言うことを聞き入れようとしないなら、教会に告げなさい。教会の言うことさえも聞こうとしないなら、彼を異邦人が取税人のように扱いなさい。」

ここでよく考えてみてください。イエス様は兄弟間で起きた罪について、どのように扱うべきかについて教えてくれていますが、兄弟が罪を犯した時、いったい、だれがその兄弟の罪を責める責任を負っているのですか？それはだれでもない「あなた」です。もし、兄弟姉妹があなたに対して罪を犯したのであればその罪に気づいているあなたがその人のところに行って、二人だけのところでその罪を知らせてあげる必要があるのです。言い換えるなら、私たちがだれかに罪を犯された時、その罪を相手に示して和解を求める責任があなたにあるということです。でも、これを聞いてある人は思うかもしれません。「何を言っているのですか？自分は何もしていないのですよ。相手が先に罪を犯したのだから、相手が私のところに来るのが当然でしょ。なぜ、やられた私が行かなければいけないのですか？」と。

皆さん、覚えておかなければいけないことは、ここでイエス様が用いていた「行って」と「責めなさい」という二つの動詞はどちらも命令形だということです。つまり、罪を犯した兄弟のところに行って、その問題を取り扱うのは、私たちの選択ではなくて神様からの命令だということです。ですから、だれかが罪を犯していると知ったとき、私自身が最初にその人のところに行って、二人だけのところでその罪を分かってあげるといふこと、それがそれぞれに与えられている責任なのです。

でも、皆さんここでカギになることは、最初から多くの人を巻き込んでいるのではないということです。二人だけの場でそれをしなさいとイエス様は言われました。もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、まず、長老や執事に連絡しなさい、すぐに友人に声をかけて助けてもらいなさいと、そのようには書かれていません。「二人だけのところで責めなさい」です。なぜ、そうするのですか？それは、こうして罪を責めるということは、その人を辱めるためでもその人を必要以上に傷つけるためでもないからです。出来る限りその人を守ってあげるために個人的に話をして、その人が罪に気づいて悔い改めて神様に立ち返ることができるようにと願って喜んで助けを与えて上げるのです。

パウロは過ちに陥った兄弟に対して持つべき態度をこのように教えています。ガラテヤ書6：1「兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。」と。皆さん、私たちがだれかの罪を戒めるということは、自分の正しさを押しつけるためではありません。自分の主張を明らかにして相手に過ちを認めさせて責めるためでもありません。私たちは柔和な心をもって、罪を犯して正しい道から外れた者が真理に立ち返ることができるようにと助けて上げるということです。だから、この行為は愛の行為になるのです。そして、これは二人だけで行うものではありませんでした。この先、罪を犯した人がその罪を認めないで話も聞き入れないのなら、二人か三人を連れて行って、それでも聞き入れないなら、教会に告げるといふようになっていきます。でも皆さん、教会に告げるといふことも、その人のことを馬鹿にするためでも、その人のことを噂するためでもありません。その人のことを全体に告げることで、教会全体がその人のことを祈って早く悔い改めへと導かれるように、交わりに帰って来ることをみながともに願って働きかけをするために、そのようにしなさいと言われるのです。

ですから皆さん、言い換えるなら、教会戒規といわれるこの行為は、どの時点においても罪を犯した者を教会から除くためにするものではないということです。その人を責めるためにするものではないのです。むしろ、愛をもって罪を指摘して上げることで、その人が心から悔い改めて神様に立ち回り交わりへと回復されていくこと、それを求めることが唯一の目的なのです。そして、これが神の家族に属する私たちひとり一人に求められていることなのです。

ある人はこれを聞いて思うかもしれません。「ああ、分かりました。でも、何度までそれをすればいい

のですか？もちろん、限界がありますよね。その人が何度も何度も罪を犯すなら、その場合は赦さなくてもいいですよ。」と。聞いたことがありますね。そうです。ペテロがまさにその質問をイエス様にしています。マタイの福音書18章に書かれています。21節「:21 そのとき、ペテロがみもとに来て言った。「主よ。兄弟が私に対して罪を犯した場合、何度まで赦すべきでしょうか。七度まででしょうか。」、「だれかが罪を犯してそのことを自分が知ったとき、その人にその罪を教えること、それはよく分かった。でも、もし、その人が何度も罪を犯し続けたらどうするのですか？私のことを傷つけ続けたらどうするのでしょうか？いったい、限度は何回まででしょうか？」って。それに対してイエス様が答えられたことは驚くべきことでした。22節にこのように続きます。「:22 イエスは言われた。「七度まで、などとはわたしは言いません。七度を七十倍するまでと言います。」と。単純に計算すれば七度を七十倍した数は490回です。490回まで赦して491回目からもう赦さなくていいということではもちろんありません。

ここでイエス様が言われたことは、罪を犯した者が悔い改めてあなたのところに来たなら、あなたがたは何度でもその兄弟を赦して上げなさいということだったのです。言い換えるなら、「私はあの人のことは赦せません！」と言うような信仰者はだれ一人としていないということです。信仰者はだれ一人として「私はあの人のことを赦せません」と言える人はいないということです。

これを聞いてまた思うかもしれません。「では、あなたはこの人が私にしたことがどれほど酷いことかが分かっていません。何度傷つけられたか、どれほど傷つけられたか、そのことをあなたが知れば、あなたも納得してくれます。もう限界なんです。」と、そんなあなたがイエス様の許に行けば、言われることは同じことです。「決して赦せない！」と言う、その権利はあなたにはありません。何度でも赦して上げなさい。それがイエス様の言われることです。

では、なぜなのでしょう？私たちはなぜ何度何度も赦すのでしょうか？それは、私たち自身が大きな愛をもって赦されたからです。生まれながらの私たちはみな神様に対して返すことのできない負債を負っていました。私たちは自分の思うままに生き、神様を愛そうとせず、この方に背を向け、逆らい続けて生きて来たのです。だからこそ、本来であれば、ほかのだれでもない私たちこそが、その罪ゆえに神様の御怒りを受けるべき存在でした。皆さん、私たちこそ欲望のままに怒りを積み上げて、自分たちの負債のすべての責任を負っていたのです。私たちにはどうあがいても自分では返すことのできない負債です。しかし、そんな愚かでもうしようもない罪に汚れた私たちのために、神様の御子であるイエス・キリストが身代わりになって十字架に架かって、私たちが本来受けるべき罰を受けてくださったのです。

1テモテ2:6にこのように書かれています。「キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自身をお与えになりました」、これこそが神様が私たちに示してくださった赦しでした。私たちが神様の敵として歩んでいるときに、神に忌み嫌われることを行っていたときに、神様ご自身の許に悔い改めと信仰を持ってやって来る者のすべての罪を、神様は赦してくださり、その罪を帳消しにしてくださったのです。その上に、もうそのことを思い起こすことをしない、そのことで私たちに責めることはしないと、そのように約束してくださったのです。

確かに、私たちが何度でも赦すということは非常に困難を伴うことでしょう。相手がどんなに酷いことをしても、それらをすべて帳消しにして、意志をもって思い起こすことをしない…、そんなことは普通はできません。でも皆さん、私たちの神様がもう私たちにそのことをしてくださったのです。私たちはそんな愛を、そんな赦しをイエス・キリストにあって受けました。だから、私たちがそのことを知っているからこそ、私たちは同じ赦しを実践する責任があり、それを実践していくことができる者へと変えられているのです。私たちは同じようにキリストによって救われ、神の家族に属する者へと召されました。その兄弟姉妹が罪を犯しているなら、罪に陥っているなら、神様を愛して、そして、その愛を受けた者として、お互いのことを愛し合って、その罪を正し合っていくということが必要になるのです。

### 3) 神の愛を証しする者であるから

最後、三つ目に「愛を伴う戒めの重要な理由」、それは「神様の愛を証しする者であるから」です。私たちが戒めを実践することは私たちが神様の愛を証しすることに繋がるのです。ここまでいろんなことを見て来ました。それでもまだ「自分にはだれかの罪を正して上げることはできません。その人が自分を受け入れてくれなかったらどうすればいいのですか？やはり到底自分には難しくできません。」と、そのように様々な葛藤を覚えている方もいるかもしれません。それなら、このことをよく覚えてください。



私たちが罪に陥った者を愛をもって助け出し、その者が交わりへと回復することを熱心に追い求めること、その愛こそ私たちの主イエス・キリストが示された愛と同じだということです。

皆さん、興味深いことに、今、私たちが見ているマタイ18:15-17の直前にこのような例えが記されています。マタイ18:12-14です。「:12 あなたがたはどう思いますか。もし、だれかが百匹の羊を持っていて、そのうちの一匹が迷い出たとしたら、その人は九十九匹を山に残して、迷った一匹を捜しに出かけないでしょうか。:13 そして、もし、いたとなれば、まことに、あなたがたに告げます。その人は迷わなかった九十九匹の羊以上にこの一匹を喜ぶのです。:14 このように、この小さい者たちのひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではありません。」、ここには失われた羊に対する主の大きな愛が描かれています。思い返してみるなら、かつて失われた羊だった私たち、その私たちを探し出してくださったのは、羊飼いであるキリストでした。考えてみてください。私たちが罪深さに気づかされたのは、神様が私たちの心に働いてくださったからでした。私たちが自分の行いで救いを手にしたのではなく、神様がキリストのうちにある救いと赦しを私たちに示してくださったのです。私たちではなく、他のだれでもない神様が私たちを探し求めてくださり、私たちに救いを備えてくださったのです。

またそれだけでなく、皆さん、神の家族として生かされている今もなお、神様は私たちが群れから迷い出るようなことがあれば、いつも私たちのことを探し出して守ってくださるのです。私たちの神様は、弱く迷ってしまうそんな羊にいつも憐れみを示してくださるのです。皆さん、どうですか？この神様の姿を私たちは証ししたいと思いませんか？その姿を明らかにする一つの方法があります。それは、私たちが罪によって迷い出た兄弟姉妹のその罪を正しく取り扱い、その人の最善を願って愛をもって戒め、その者が群れの交わりへと回復されることを追い求めることです。

群れから迷い出ている者、罪を犯して間違った道へ行こうとしている者を、私たちが愛をもって連れ戻そうとするなら、その姿によって私たちはキリストの福音を明らかにすることができるのです。私たちは罪の中から神様の愛と憐れみによって助け出されました。だからこそ、私たちはその同じ愛と憐れみをもって、罪に陥っている人をそこから助け出して上げることが必要になるのです。

#### 〇まとめ

「愛をもって罪を戒め合うこと」、それが私たちが壊れた関係を修復するための三つ目の要素でした。確実に言えることは、私たちはこの点において益々成長しなければならない部分が多々あるということです。このように言う私自身も今回メッセージを思い巡らせていて、自分はどれほど罪を深刻な問題として扱っているか？教会の聖さをどれほど求めているのか？皆さん一人ひとりに対して愛をもって仕えているだろうか？と、そのことを何度も何度も問われました。願わくは、皆さんにとっても同じであればと思います。キリストの大きな愛のゆえに罪から救い出された私たちは、同じ神様を愛する神の家族として生きているその中であって、罪に苦しんでいる者を助け出して上げることは、みことばと聖霊の助けによってできるのです。そのために私たちができること、それは罪を正して上げるということでした。そのような者としてともに成長して行きましょう。